

# 王粲の「七哀詩」と建安詩

## 道家 春代

はじめに

三曹（曹操・曹丕・曹植）とそれを取りまく七子（孔融・陳琳・阮瑀・徐幹・應瑒・劉楨・王粲）が活躍した建安文学は、詩を、質的にも量的にも新たな段階へと引き揚げた。詩史における建安詩人の功績には、すでに諸家に指摘されているように、四言に加えて、五言、六言、七言等の詩型を試み、中でも特に五言詩を飛躍的に発展させたこと、そしてその五言詩において、宴会、贈答、游仙などを新たに詩の題材に開拓し、詠物、遊覧等も賦から取り入れて拡大したこと、それ以前の単純な表現に、典故、対句、詩構成に工夫を凝らして表現の幅を広げて、詩人個人の内情を表現するものとして成熟させたことが挙げられる。

伊藤正文氏は「建安詩がすぐれた理由として、多様なものの混淆と統一を指摘」されその多様なものの中には、曹操に代表される「感情豊富な民歌形式の作品、即ち古

詩・古楽府を文学形式に高め」た流れと、いまひとつ、王粲に代表される「文人の伝統を継承して、漢賦を詩に導入した流れ」があり、「この二つの大きな流れをうけて、集大成したのが、曹植である」<sup>①</sup>とされる。確かにこの図式には首肯させられる。それは単に建安詩人の個々を見て、その作品には、自ずと詩体の区別があること、すなわち、曹操を筆頭に、三曹はしきりに楽府を作っているが、七子は陳琳と阮瑀が一首ずつ残しているほかは、誰も楽府を残していないことにも表れている。

建安詩人は詩体（楽府、四言、五言など）を明確に区別している、すなわち、うたう内容によって詩体を意識的に選択しているように思われる。詩体選択（うたう内容）には、詩人個々の出自とそれに規定される精神のありようが関係していたのでは、と推測される。それを考察するこ

とは、民歌を継承する流れと文人の伝統を継承する流れとを含んだ、建安詩の複雑な様相を照らしだすに有効である。そしてその複雑なせめぎあいを統一して、建安詩というひとつのスタイルを築いたことには、曹氏父子の下による集団文学であったことが決定的な意味を持っているのではないだろうか。

翻って考えてみれば、建安文学は、三曹七子の天才たちによつて突如生みだされたものではない。当然それを用意する後漢半ば、後半の文学状況が存在したはずである。その状況のなにはどうかは、帰曹以前の七子の状況を表したものではないだろうか。その状況をとらえることによつて、建安詩の様相を、その担い手である詩人たちの精神との関わりの中で解明できるのではないか。そのためには帰曹以前の七子の文学的状况について詳しく考証する必要があるが、本稿では、王粲の「七哀詩」について従来の説に疑問を提出して検討することによつて、建安詩が、集団文学であったことの意味を考えたい。

## 一

ここで簡単に王粲の生涯をふりかえってみよう<sup>②</sup>。

王粲は、山陽高平の人、霊帝の熹平六年（一七七）に生まれた。曾祖父王龔は大尉、祖父王暢は八俊に数えられた司空と、二代にわたって三公を出した名家の出で、父王謙

は大將軍何進の長史となった。しかし、謙は彼が名公の血筋であることから彼の二人の子との婚姻を何進が迫ったのを断り、病気を理由にその職から退いた。その後すぐに霊帝死後の混乱が起り、何進は誅戮されたのであるから、その身の処し方には先見の明があったといえる。王謙はその後家に卒したというが、その卒年はわかっていない。

初平元年（一九〇）董卓による献帝西遷に従つて、十四歳の王粲も長安に居を移した。その長安で王粲は異才を蔡邕に認められ、邕の蔵書を譲り受けた。蔡邕は董卓に招かれて出仕し、厚遇を得ていた。初平三年（一九二）、董卓が殺されたとき蔡邕も連座して獄死した。王粲はその直後の二度の召辟を断り、難を避けて荊州に劉表を頼った。劉表は、王粲と同郷出身で、祖父王暢に学を受けたことのある人物だった。代表作「七哀詩」其一はその時の経験をふまえたものである。その時十六歳、『三國志』王粲伝によればそれは翌年十七歳の時になる。

しかし、名家の出であり、また己れの才能も自負していた王粲ではあったが、期待に反して貧弱な容貌と軽々しい性格のために劉表に重用されなかつた。王粲は己れを使いこなせぬ劉表に忿懣を抱きつつそのまま十六年を荊州で過ごした。その不満と望郷の情を歌ったとされるのが「七哀詩」其二である。この詩はその内容が「登樓賦」と近似しているため、同じ頃の作品とする論者がほとんどである。

「七哀詩」其一・其二の二首は、従来帰曹前の王粲の五言詩でしかも生涯を通じての代表作と考えられている。その他に、「雜詩」「鷺鳥化爲鳩」<sup>③</sup>も、『建安七子詩箋註』は荆州期の作とする。しかし徐公持らの考えるように帰曹後の作品とするのが妥当であろう<sup>④</sup>。

建安十三年（二〇八）、すでに袁紹一族を滅ぼして中原を固めた曹操が荆州に南下したが、曹操が至る前に劉表はあつけなく病死した。後を継いだ子の劉琮は王粲らの勧めに従って曹操に帰順し、王粲も曹操の幕下に降った。彼は丞相掾としてむかえられ、関内侯の爵を賜った。そしてその後、建安二十二年（二一八）に病没するまで、建安文学サロンの中心メンバーとして多くの詩文を制作した。

## 二

建安詩にふたつの流れ、曹操を代表とする民歌の流れ、王粲を中心とする文人の伝統を認めるとすると、王粲の帰曹後に建安詩の変化或いは発展、すなわち冒頭にあげた豊かな実りの多くの部分が、彼の建安文壇参加によつてもたらされたものであることを予想できるが、一方それとともに、王粲自身の文学も、曹操の影響化にあつたその時点までの建安文学から何らかの影響を得たことも推測するべきであろう。それは理屈としては、抒情的な民歌の流れから得たと考えられる。ところが実際は、王粲は帰曹前はもち

ろん帰曹後も一首の楽府も残していない、少なくとも現存していない。郭茂倩『樂府詩集』に「從軍行」として収録されている「從軍詩」が、むしろ「征賦」の変形であつて、他の「從軍行」を題とする楽府とはまったく内容をことにすることは伊藤氏に指摘されている<sup>⑤</sup>。「兪兒舞歌」は宗廟歌であり、民歌的なものからはずれる。では王粲は帰曹後民歌の影響をそれまでの建安詩から受けなかつたのであろうか。

王粲は「楽府」という民歌直系の詩歌形式を採用することはないが、その作品には「古詩」の抒情的表現や内容を引き継ぐものを多く見ることができ、殊に「七哀詩」其一・其二はその影響を見いだしやすい作品である。古詩は民歌の流れをひいているし、「五言詩」という形式そのものが民歌の流れをひいているともいえる。とすれば、王粲の抒情詩は、やはり民歌の流れを受け継いでいると考えられる。しかし王粲が帰曹以前すでに「七哀詩」其一・其二を作っているとすれば、王粲は建安詩とは関わりなく民歌の流れを受け継いでいたことになり、王粲自身の文学にとつての、建安詩壇に参加したことの積極的意義を見いだしにくくなってしまう<sup>⑥</sup>。では、「七哀詩」其一・其二を、帰曹後、往時を追懐してなしたものと考えられないだろうか。ここで、二首を引いてその可能性を検討してみることにする。

## 其一

西京亂無象 豺虎方遘患 復棄中國去 遠身適荆蠻 親戚對我悲 朋友相追攀 出門無所見 白骨蔽平原 路有飢婦人 抱子棄草間 顧聞號泣聲 揮涕獨不還 未知身死處 何能兩相完 驅馬棄之去 不忍聽此言 南登霸陵岸 迴首望長安 悟彼下泉人 喟然傷心肝

西京 亂れて象無く 豺虎 方に患を遘う 復た中國を棄てて去り 身を遠ざけて荆蠻に適く 親戚 我に對いて悲しみ 朋友 相追攀す 門を出でて見る所無く 白骨 平原を蔽う 路に飢えたる婦人有り 子を抱きて草間に棄つ 顧て號泣の聲を聞くも 涕を揮いて獨り還らず 未だ身の死す處を知らず 何ぞ能く兩つながら相完うせん 馬を驅りて之を棄てて去る 此の言を聽くに忍びず 南に霸陵の岸に登り 首を迴して長安を望む 悟る 彼の下泉の人の 喟然として心肝を傷ましむるを

## 其二

荆蠻非我鄉 何爲久滯淫 方舟溯大江 日暮愁我心 山崗有餘暎 巖阿增重陰 狐狸馳赴穴 飛鳥翔故林 流波激清響 猴猿臨岸吟 迅風拂裳袂 白露霑衣衿 獨夜不能寐 攝衣起撫琴 絲桐感人情 爲我發悲音 羈旅無終極 憂思壯難任 私がこの二首を帰曹後の作品ではないかと疑う根拠はいくつかある。

荆蠻 我が郷に非ず 何爲れぞ久しく滯淫せん 舟を方べて 大江を溯れば 日暮れて我が心を愁えしむ 山崗に餘暎有り 巖阿に重陰増す 狐狸は馳せて穴に赴き 飛鳥は故林に翔ける 流波 清響を激しくし 猴猿 岸に臨みて吟ぶ 迅風 裳の袂を拂い 白露 衣の衿を霑す 獨夜 寐ぬること能わず 衣を撮りて起きて琴を撫く 絲桐 人の情に感じ 我が爲に悲音を發す 羈旅に終極無く 憂思 壯んにして任え難し

その一つは、二首とも荆州を「荆蠻」といいきつていることである。荆州時代に書かれたと特定できる詩文には、四首の四言詩「贈蔡子篤」「贈士孫文始」「贈文叔良」「思

親詩」と、いくつかの文章（「荊州文学記官志」「三輔論」など）があるが、詩を含めてどれもそういう言い方をしていない。其二と同内容の「登樓賦」もわかりである。詩の内容は二首とも個人的な感情をいうものであるが、当時、公開されないことを前提にして詩が書かれることはなかったのではないか。荊州は元は蠻であったかもしれないが、劉表の治の下にある現在では十分に文明化され、名声ある士人たちも多く集まってきた。現に彼自身も劉表の庇護のもとにある。それを「荆蠻」というのは不自然である。荊州以外の場所で作られたと考えるのが妥当ではないか。

二つめは、この頃王粲には五言詩を作るといふ発想がなかったのではないかと思われることによる。

「七哀詩」を除いて荊州期の詩作品として確認されるのは、先に触れたように「贈蔡子篤」「贈士孫文始」「贈文叔良」「思親詩」の四首の四言詩である。「贈蔡子篤」は、王粲とともに荊州に難を避けていた友人の蔡睦が故里に帰ることになった時、別離を惜しんで贈った詩。士孫文始は士孫萌、やはり荊州に難を避けていた人。王允とともに董卓を誅殺する謀をたて、献帝の東帰に従う途中乱兵に殺された士孫瑞の子である。献帝が許都に落ち着いた後、父の功によって澹津侯に封ぜられた。彼と通好のあった王粲が、彼が封国に赴く際に贈った別離の詩が「贈士孫文始」である。建安元年（一九六）をそれほどおくない時期に制作

されたものであろう。「贈文叔良」は、劉表のために蜀の劉璋に使いする文穎を送る際、任務を立派に果たすようはげまし、門出をことほぐもの。「建安七子集」は興平元年（一九四）、「建安七子詩箋註」は建安十三年（二〇八）の作とする。これら三首はみな『文選』の贈答詩の始めに置かれている。おそらく旅立つ人を送る公式又は準公式の送別の宴で披露されたものであろう。「思親詩」は、母を失った友人藩文則に代わって哀悼の情を歌ったものである。「建安七子集」は徐公持「建安七子詩文繫年考證」の建安六年（二〇一）作説を引いている。

これらの詩には、曹操の四言詩（樂府）にみられるような自由さは感じられないし、難解でもあり形式ばったものを感じてしまう。ところで、これらは四言詩でなければならぬ必然はあっただろうか。「贈文叔良」は別として、友人との別離の情を歌うのは十分五言詩のテーマでありえるし、肉親を失った哀情もまた然りである。やや時期を晚くするが、曹植の「送應氏」二首もある。私にはこの時期の王粲には「詩」（少なくとも知識人のなす公的な「詩」）はすべからず四言でなければならぬという固定した考えがあったように思えてならない。少なくとも積極的な五言詩作者であったとは考えにくい。

三つめに、「七哀」が建安詩に初めて登場した詩題で、連作である可能性もあるからである。

『古文苑』の「粲集七哀詩六首」の語がどれほど信憑性があるかはおいても、「七哀詩」が連作の詩題である可能性はすでに多くの論者によって指摘されている<sup>⑦</sup>。しかしその形式は「内容の積上げを意図する連作ではなく」「詩人が哀しむべき事象に遭遇することによって、一篇を増していく形式を取ったのではないか」と伊藤氏はいい、<sup>⑧</sup>『建安七子詩箋註』もその立場を取っている。私はそれに基本的には賛成だが、同時に疑問も感じている。仮に其一を初平三年（一九二）の作、其二を荊州在任の後半または荊州を離れた直後、すなわち建安九年（二〇四）〜十三年（二〇八）の間の作、其三（王粲の作であることを疑問視する向きもある）を建安二十年（二一五）の張魯征討のおりのものとすると、其一から其三の間は二十年以上あり、これら三首の他に三首を挟んでも、おりに触れての連作としても長きにわたりすぎるように思える。

もつとも、其一の制作時期についてはすでに有力な別説がある。張玉穀『古詩賞析』の「荆に赴く時の事を追叙して感懐するなり」がその始めである。しかし、この作が「追叙」したものであるとしても、帰曹以前の、つまり荊州期の代表作と考える論者がほとんどである。が、鈴木修次氏は『漢魏詩の研究』に其一について「あるいは王粲が長安を離れて荊州の劉表のもとに身を寄せたときの経験にふまえて作られているかもしれない」と本文で述べ、注で

張玉穀に賛意を表しているが、<sup>⑨</sup>帰曹前の作品とは明言していない。むしろ、「七哀」が建安詩壇において新たに設けられた題で、連作である可能性が高いことを強調されているところをみると、建安詩壇参加後の作品であると考えておられるように私には思え、私自身もそう考えたいのである。とすれば、其二も荊州時代を追懐した作であつてもよいのではないだろうか。

王粲の「七哀詩」は、「七哀」の題を設定したときに、それまでの自己の経験から「哀」にふさわしいものを選びだして詠じたものと考えるほうが自然ではなからうか。あるいは、一、二首の詩の制作が先にあつて、その後いろいろな「哀」を付け加える興趣が起つて「七哀」の題が作られたとも考えられる。むしろどちらの場合も、その後文字どおり折りに触れての増作はありうるとして。

建安詩人による「七哀詩」は王粲のもの他に、曹植と阮瑀に一首ずつ残っている。『建安七子集』のように『藝文類聚』巻三四にしたがつて「臨川多悲風」<sup>⑩</sup>もそれとすれば阮瑀は二首となる。

## 七哀詩

曹植

明月照高樓

明月 高樓を照らし

流光正徘徊

流光 正に徘徊す

上有愁思婦

上に愁思の婦有り

悲歎有餘哀

悲歎して餘哀有り

借問歎者誰

借問す 歎く者は誰ぞ

言是宕子妻

言う 是れ宕子の妻なりと

君行踰十年

君行きて十年を踰え

孤妾常獨棲

孤妾 常に獨り棲む

君若清路塵

君は清路の塵の若く

妾若濁水泥

妾は濁水の泥の若し

浮沈各異勢

浮沈 各勢いを異にし

會合何時諧

會合 何れの時にか諧わん

願爲西南風

願わくは西南の風と爲り

長逝入君懷

長逝して君の懷に入らん

君懷良不開

君の懷 良に開かずんば

賤妾當何依

賤妾 當に何にか依るべき

七哀詩

阮瑀

丁年難再遇

丁年 再び遇い難し

富貴不重來

富貴 重ねて來たらず

良時忽一過

良時 忽ち一たび過ぎれば

身體爲土灰

身體 土灰と爲る

冥冥九泉室

冥冥たり 九泉の室

漫漫長夜臺

漫漫たり 長夜の臺

身盡氣力索

身盡き氣力索されば

精魂靡所能

精魂 能くする所靡し

嘉肴設不御

嘉肴 設けらるも御いざるに

旨酒盈觴杯

旨酒 觴杯に盈たさる

出壙望故郷

壙を出でて故郷を望めば

但見蒿與菜

但だ蒿と菜とを見る

同

同

臨川多悲風

臨川 悲風多く

秋日苦清涼

秋日 清涼に苦しむ

客子易爲戚

客子 戚を爲し易く

感此用哀傷

此れに感じて用って哀傷す

攬衣久躑躅

衣を攬りて久しく躑躅し

上觀心與房

上に心と房とを觀る

三星守故次

三星 故次を守り

明月未收光

明月 未だ光を収めず

雞鳴當何時

雞鳴くは當に何れの時なるべけん

朝晨尚未央

朝晨 尚お未だ央きず

還坐長歎息

還た坐るに長く歎息す

憂憂安可忘

憂憂 安んぞ忘るべけん

曹植の「七哀詩」は客子の妻の悲嘆をいういわゆる棄婦

詩である。「宕子」とその妻に兄文帝曹丕と曹植自身をなぞらえる曹植後期の作品とする説もあるが、私はこれは擬古詩的な作品で、詩にうたわれている感情は作られた悲嘆であると考える。阮瑀のは、前者はすべての生者が負う虚

しい死を迎えねばならないという運命を、後者は客子の憂いをうたうものである。これらも、王粲の作品で述べたのと同じように、「哀」というテーマがあつて、それに合う題材を探して作成されたものと考えられることもできるだろう。競争とまでは言わないが、三者の「七哀詩」は制作に関係があると思うのは考えすぎであろうか。

ここで王粲の「七哀詩」其一に戻ってみよう。

王粲は長安の荒廃に見切りをつけ、荊州に難を避けることを決意し、とどめる肉親、友人をふりきつて家を出る。その時彼は戦乱が人の心まで破壊しきってしまった絶望的な光景を目撃する。廃墟と化し、死体が放置されたままになつている都の草むら、子を棄てる母親の姿。彼は、彼女の冷酷な、そして痛切な悲哀に満ちた言葉を聞くにたえず、また、彼自身も子を救うこともせず、その場から駆け去る。そして治の時代である文帝の陵に登って長安を望み見て、『詩經』の詩人が治世を願つてうたった「下泉」の痛みが、しみじみとわかつたと篇を結ぶ。

中間に挟まれる「子捨ての母」は樂府的な題材である。これが実際に王粲自身が目撃した事件かどうかはさほど問題ではない。このようなことは十分起りうる時代状況であつたし、風聞もあつたらう。重要なのは、これを王粲が題材として詩に取り上げたことである。詩中に登場人物の語り、台詞がいれられ、物語りまた劇の一場面を彷彿とさせ

る表現が用いられるのは古樂府の常套である。「孤兒行」「婦病行」「東門行」等、例はいくらでもある。また、「古詩十九首」のいくつかにも台詞の痕跡が残っている。子捨ての母という樂府的な題材を詠ずるにあたって王粲はやはりこの樂府の手法を用いている。この手法は建安詩人によつてしばしば用いられている。曹植の「七哀詩」は「古詩十九首」の其三・其五を意識した擬古詩的側面が強いが、曹植はこの樂府の手法を意識的に用いて、単なる擬古詩に終らない秀作とした。阮瑀の「七哀詩」はこの手法を取らないが、彼の「駕出北郭門行」はこの仕立てで書かれていない。陳琳の「飲馬長城窟行」も例に挙げる事ができる。もっとも阮瑀と陳琳の作品は樂府題であるので単純には比較できないが、同じグループにいた二人の先輩の作品に刺激を受けたことは考えられる<sup>①</sup>。王粲も曹植もそれぞれの個性と研鑽によつて、樂府の手法を用いながらも創作詩としての質を保つ、それも最高のレベルを保持する詩に成し遂げている事はいうまでもない。王粲の「七哀詩」其一が子捨ての母という樂府的な題材を採用していることを、伊藤氏は蔡邕との関係につなぐが、むしろ同じ建安詩のグループにつなぐほうが自然ではないだろうか<sup>②</sup>。

三者五首の「七哀詩」のテーマや題材がどれも古樂府や古詩を継承していることから、これらの詩を一つのまとまりとして考えることができるだろう。

今一つは、詩語の問題である。王粲其一の第八句「白骨蔽平原」はかなり強烈な印象をもたせる句である。「門を出でて見る所無し、白骨平原を蔽う」は、彼の見た現実の光景、または、それを誇張した表現であろう。しかしこれは王粲にオリジナルな表現ではない。建安詩においては類似的表現がしばしば見受けられる。今「白骨」という語を含む詩句を、漢から南北朝に至る詩から拾ってみることにする。

孔融「雜詩」其二 「褰裳上墟丘、但見蒿與薇、白骨

歸黃泉、肌體乘塵飛」

曹操「蒿里行」 「鎧甲生蟻虱、萬姓以死亡、白骨露

於野、千里無雞鳴、生民百遺一、念之斷人腸」

蔡琰「悲憤詩」其一 「白骨不知誰、從橫莫覆蓋、出

門無人聲、豺狼號且吠」

同「胡笳十八拍」 「塞上黃蒿兮枝枯乾、沙場白骨兮

刀痕箭瘢」

曹丕「令詩」 「喪亂悠悠過紀、白骨縱橫萬里」

潘岳「關中詩」 「哀此黎元、無罪無辜、肝腦塗地、

白骨交衢」

「化胡歌」 「吾後千餘年、白骨如丘山、屍骸路草野、

流血成洪淵」

孔融の詩は、留守にしていた間に亡くなった幼子を悼むもので、この場合の「白骨」は亡き子の埋葬された遺骸の

ことをさすのであるから、王粲のものとは用法が違う。それでも「白骨」の語が使われるのが建工期に集中しているのが注目される。戦乱がこの後も断続的に繰り返された、また、詩人が建安後、飛躍的に増したにもかかわらず、ほとんど見られなくなることを考えれば、「白骨」の語がむしろ詩語としては馴染みにくい語であったのでは、と思われる。このような一種激越で露骨な表現は、建工期の詩人たちの共通した現実把握のなかで生まれた、この時期特有の表現だったのではないか。しかも、距離的に離れた各地で、それぞれに作したというより、やはりつながりのあるグループのなかで使用されたと考えたほうがよいのではないだろうか。

蔡琰は、父蔡邕の獄死後、興平中（一九四〜一九六）に胡騎につれさらられ、南匈奴左賢王の妻となって二子を生み、十二年を胡地で過した。曹操に金壁で贖われ中国に還ったのは建安十三年（二〇五〜二〇七）で、彼女が胡地にあったのは、ちょうど王粲が荊州にいた時期に重なる。王粲は長安で蔡邕に才を認められていたのであるから、おそらくふたりはお互いに知っていたことだろう。そのふたりが曹操のもとにあることとなった。蔡琰が「悲憤詩」をつくったのは中国にもどった後のことである。彼女は「建安文人グループ」に直接参加していたわけではないが、彼らと共通した現実観とそれを表現する言葉とを持っていただけ

ろう。

これらの表現の源をたずねてみると、古楽府にゆきあたる。潘岳「關中詩」で『文選』李善注は「古出夏北門行」の「白骨不覆、疫癘淫行」を引いている。前後が残されていない断片なので、全体の内容を把握できないが、建安詩に先立つ（同時期の可能性もある）同様の表現と考えられる。建安詩の民歌的傾向を再確認させられる表現である。

### 三

建安詩以前には、当時流行していた楽府にしる五言詩にしる、それそのものに無名性が別ちがたく備わっていたのではないだろうか。そして、それは知識人が公け、準公けの席でいわば署名入りで披露するものとしては考えられていなかったのではないだろうか。知識人が心情を吐露する詩型式は四言詩だったのである。例えば、前漢の韋孟「諷諫詩」韋玄成「自効詩」、後漢では傅毅「迪志詩」等がそれで、その傾向は王粲より三歳若い同郷の仲長統がその志を表す詩の詩体に伝統的な四言詩を選んでいふことにもみられ、またさらに、嵇康の「幽憤詩」にまで及んでいる。王粲の荆州時代の四言詩はその流れのなかで考えられるだろう。「古詩十九首」が、知識人の手を経たものであることは大方に認められていることであるが、その作者が不明であることは、作者は作品の影に隠れなければならない、

あるいは作者として現れる事は考えに及びもしない、また求められることもないという傾向を表していると思われる。

それが活発に知識人たちによって個人名で作られるようになったのは、もちろん建安文学からであるが、それを促した大きな要因は、建安文学が集団文学であったことではないだろうか。その集団の行き方をリードしたのは曹操の楽府制作であろう。新しい楽府の制作者が時の権力者であったことが、楽府の無名性に勝った。その楽府が、優れて個性的であり古辞から自由であったことも重要であった。曹操に楽府を制作させたのは、彼の詩人としての天性であったろうが、外的要因も見落としてはならないであろう。曹操は黄巾の乱以来ほとんどの生涯を軍中に暮らした。軍は人民の集合離散する場である。勢力を拡大するごとに曹操の軍は増大し、各地の兵士が集まってくる。軍での兵士たちの数少ない娯楽の中に、歌や舞いは大きな部分を占めていただろう。曹操は身近に民衆の歌謡に触れる機会に恵まれていた。これが曹操の楽府制作に影響を及ぼしたことは考えてよいであろう。帰曹前に袁紹父子のもとでやはり長く軍中に暮らした陳琳に「飲馬長城窟行」の楽府作品があるのもうなずける。

作者が自らが成員となっている共同体の共有する感情や物語をうたう楽府においては、作者は古詩以上にその作品を共有する集団の中に埋もれるべきものである。その楽府

が曹操という強烈な個性の人物の志や感慨を表出し、しかも彼の作品であることを主張したのである。それが「当路者が芸人としてふるまうことによつて共同体に参入し自身の政治的立場をより安定させようとする意識があつた」という政治的意図のものであつたとしても、共同体から離れた人々の悲哀を歌う古詩の後継である五言詩が、作者名をもつようになるのは易いことである。

楽府及び五言詩の無名性をうちやぶつたについては、曹操の個性と力が不可欠のものであつたに違いないが、そればかりではないだろう。曹操の影響をそれ程多く考えられない孔融にも五言詩（「臨終詩」「雑詩」二首）は残っているし、建安詩直前の蔡邕も作っている。王粲が生まれた熹平六年（一七七）に二八歳で獄中死した酈炎がすでに二首の五言詩を残していることも見逃してはいけないうだろう。民間歌謡と知識人の文学が融合を完成せんとするはちきれんばかりの状況が、建安文学直前に用意されていたものと思われる。それについては、また別に論じたい。

諸年譜の説を総合すると、王粲が帰曹した建安十三年の曹操の劉表討征の軍には、陳琳、阮瑀、徐幹、劉楨、應瑒の五人がすべて参加していた可能性が高く、軍中に長じた曹丕と曹植も加わっていた可能性も考えられる。『三國志』王粲伝の伝えるところによれば、曹操は帰降した王粲らのために、漢水の浜で宴を開いて歓迎したというが、その宴

には建安詩人たちが皆座に列していた事であろう。そこでは曹操の自作の楽府が歌われ、古詩が朗誦され、座に列なつた詩人たちの作品が披露されたと思うのは、たくましくすぎる想像であろうか。むしろ王粲は文学の士としてではなく、経世の材として曹操のもとで働くことを抱負としていたのだが、この自由な詩歌の環境に目を見開かれたことは想像に難くない。この場には、荊州時代に友人を見送ったときの堅苦しい四言詩の生まれる余地はない。楽府及び五言詩の無名性がうちやぶられた、うちやぶられつつあつた建安文人グループに王粲は帰属したのである。この集団に入ることによつて五言詩人王粲は誕生したのではないだろうか。

## 注

- ① 伊藤正文「王粲詩論考」『中國文學報』第二十冊、一九六五年。
- ② 王粲の伝記については以下のものを参照した。伊藤正文「王粲伝論（一）（二）」『漢文教室』六六、六七号、一九六四年。兪紹初校點『王粲集』附「王粲年譜」中華書局、一九八〇年五月。兪紹初輯校『建安七子集』附「建安七子年譜」中華書局、一九八九年七月。郁賢皓・張采民箋註『建安七子詩箋註』附「建安七子年表」巴蜀書社、一九九〇年五月。
- ③ 『古文苑』は「雑詩」四首其四とし、『藝文類聚』卷九二は「詩」とする。

④ 徐公持「建安七子詩文繫年考證」『文學遺產増刊』第十四輯、一九八二年二月。

⑤ 伊藤正文前掲論文。

⑥ 王粲の帰曹後の詩文の変化または変質は、すでに諸氏によって指摘されているが、私は「変化」「変質」というより、いまはむしろ、建安文壇に参加したこと、王粲詩にとっての根本的な意義を、積極的に見いだしたのである。

⑦ 鈴木修次『漢魏詩の研究』大修館書店、一九六七年三月。

⑧ 伊藤正文前掲論文。

⑨ 鈴木修次前掲書、第三章第三項三。

⑩ 鈴木修次前掲書、第三章第二項三。

⑪ 馮惟訥『古詩紀』は「雜詩」と題する。『藝文類聚』巻二七は単に「詩」とする。

⑫ これについては「建安期の曹植の詩について」（『名古屋女子大学紀要（人文・社会篇）』第三六号、一九九〇年三月）で詳しく述べた。

⑬ 安東諒氏は「七哀詩」其一が、長安を離れ荆州へ赴いたときより「少しく後」の作ではないかとされた上で、「若き日に蔡邕という師を同じくする同世代の二人の文人（阮瑀と王粲）が、古辞（「婦病行」「孤兒行」）をふまえてその作品（「駕出北郭門行」と「七哀詩」）を競ったのではないかという楽しい妄想」をしておられるものの、やはり「七哀詩」を「建安の文学集団ができる以前にあ」るものとされている。

「王粲の『七哀詩』の位置」『中國中世文學研究』第七号、一九六八年八月。（内道家）

⑭ 伊藤正文前掲論文。

⑮ 呉世昌氏は五言詩の起源は婦女文学にあるとする。（論五言詩起源于婦女文學考）『中國文學報』第三六冊、一九八五年十月）そうであるとすればいっそう、男性知識人は個人名のもとに五言詩を作りにくかったであろうと考えられる。

⑯ 森瀬壽三「楽府文学の特質」『立命館文学』四三〇、四三一、四三二（白川静博士古稀記念中國文史論叢）、一九八一年六月。

⑰ 森瀬壽三「雜詩」の性質について」関西大学『文学論集』第三四巻第一号、一九八四年十一月。

⑱ ②であげたもののほかに次のものを参照した。中川薫「建安文人伝（一）」（四）『鳥取大学文学芸学部研究報告（人文社会科学）』第十二、十四、十五、十六号、一九六一、三、四、五年。伊藤正文「劉楨傳論」『吉川博士退休記念中國文學論集』一九六八年三月。松本幸男「建安詩壇の形成過程について」『立命館文学』一八四、一八六、一八八、一八九、一九六〇、一年。

⑳ 甲斐勝二「王粲の詩賦とその志について」九州大學中國文學會『中國文學論集』第十五號、一九八六年。

㉑ 王粲は劉楨らと同じく楽府を作ることをしなかった。そのことの意味については今回論じることができなかった。ある

いは、民歌の流れを汲むとはいえ、五言詩を作るとは民歌直系の「楽府」を作ることほど大きな飛躍を要することはなく、王粲らは「楽府」を作ること己れに許すことができなほどの保守的文人であつたからであらうか。今後の課題としたい。